

「ベル友」ブームを巻き起こした 「ポケットベル[®](現クイックキャスト[®])」の歴史

1968年7月から始まった「ポケットベル」サービスは、一斉同報ができるなどの利点から主に官公庁や医療関係者などから利用が拡がり、緊急時の連絡手段として使用されました。日本での無線呼出しサービスは初めてのことで、サービス開始以前から「テレビや電話をポケットに入るくらいに小型化してほしい」との強いニーズがあったため、ポケットベルは格好の話題となりました。

一般企業の営業担当者や個人にも利用が広がった後、若者中心にポケットベルにメッセージを送りあうという「ベル友」ブームを巻き起こし、1996年に1,078万契約(ドコモで649万)のピークを迎えました。それ以降も、ポケットベルで受信したメッセージ(ニュースなど)を外部接続端子から電光掲示板やパソコンに繋いで表示するサービスや、基本料無料の「02・DO(ゼロニード)」などサービスを向上させてまいりました。

しかし、音声通話やメッセージサービスが双方向でできる携帯電話やPHSが普及したことでポケットベルの契約数は減少することとなり、2007年3月31日(土)にサービス終了を迎えます。

今回は、約40年間続いた「ポケットベル」の歴史についてレポートいたします。

■ベル友ブーム

女子高生を中心とした若者が、語呂合わせで意味をつけた数字を文字制限いっぱい工夫してメッセージを送るといった「言葉遊び」が大流行し、新しいコミュニケーション文化が始まりました。カナや漢字表示タイプが出ると、メッセージの内容も「おはよう」などの挨拶のほかに自分の感情をより細かく伝え、友情関係を築くツールになりました。当時は、電話と違って送信者は好きなときに相手の状況を気にせず送信でき、受信者は気が向いたときに内容を確認できるので、受信者側に選択肢がある「やさしいコミュニケーションツール」との評価もありました。

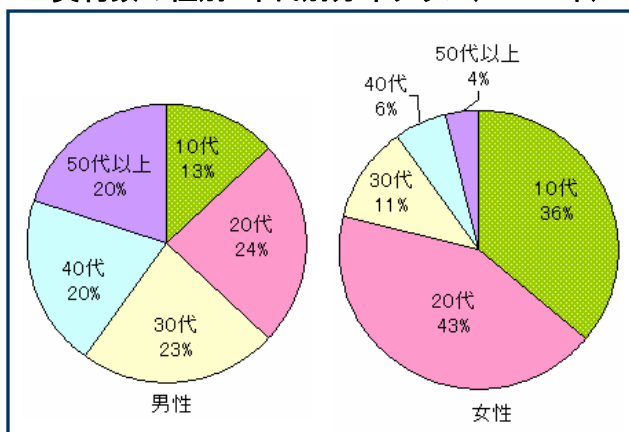
また、社会に与えた影響も大きく、1993年に製作されたテレビドラマ「ポケベルが鳴らなくて」や、同名の主題歌がヒットしました。ポケットベルにメッセージを送るために公衆電話に行列を作ったり、仲間うちでプッシュボタンの早打ちが競われたりしました。契約が増えるにつれ、ネットワークに与えるトラヒックの影響も非常に大きく、設備の増設も頻繁に行われました。

しかし、ベル友ブームを支えた若者は、携帯電話やPHSの料金低廉化が進むにつれて、公衆電話に並ぶ必要がなく、すぐに返信ができる携帯電話のショートメール等に移行する動きが加速し、文字メッセージによるコミュニケーション文化が引き継がれていきました。

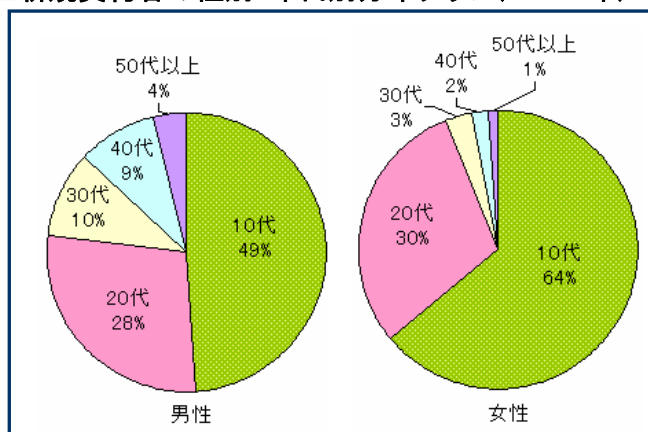
数字メッセージの例

0840(おはよう)
724106(何してる?)
49(至急)
889(早く)
0906(遅れる)
14106(愛してる)
3470(さよなら)

■契約数の性別・年代別分布グラフ(1996年)



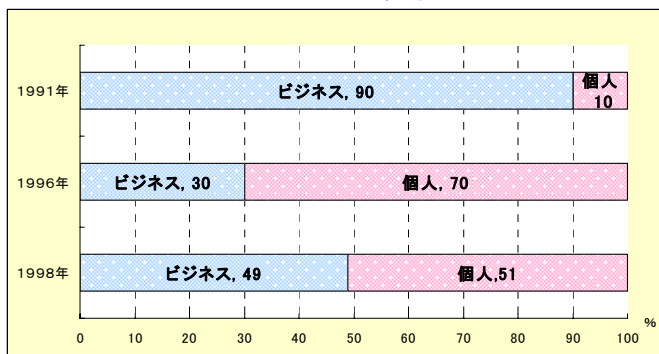
■新規契約者の性別・年代別分布グラフ(1996年)



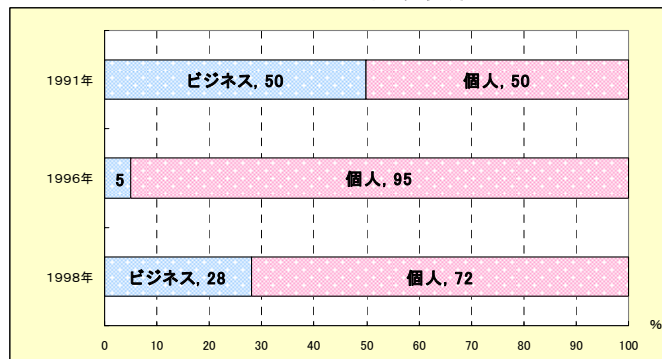
契約数のピーク時は、10代女性の契約数が女性全体の36%、新規契約に至っては、10代女性の契約が女性全体の新規契約の64%も占めています。この数字を見ても女子高生による「ベル友」ブームに支えられていたということが分かります。

女性に比べて男性は30代～50代以上でポケットベル所持率が高く、ビジネスでも活用されていることがわかります。

■ビジネス/個人ユーザーの契約者比率



■ビジネス/個人ユーザーの新規契約者比率



1991年は、ビジネスユーザーが主で全契約数の90%を占めており、1日平均1～2回の緊急連絡用に使われていましたが、1996年には個人ユーザーが全契約数の70%を占め、1日あたり30通ものメッセージを送りあうというように、使用形態が変化していきました。

1991年の新規契約は、ビジネス/個人ユーザーがそれぞれ半数を占めていたのに対し、1996年にはそのほとんどが個人ユーザーで占められています。さらに、ピークが過ぎた1998年には再びビジネスユーザーの新規契約が増え、特化されたビジネスユースへと変化していきました。

■ポケットベルのサイズや質量の変化

サービス開始当初、音のみでお知らせしていたポケットベルも、1987年には数字や記号を使ったメッセージをディスプレイに表示できるようになり、その後漢字カナ混じりの定型文やイラストを使ったメッセージを送れるようになりました。表示可能な文字数も、初期の12桁表示の改善を重ね、全角60文字以上表示可能な機種も発売されました。ポケットベルの形も様々なものが発売され、カード型、ペン型のほか、腕時計型や電子手帳との一体型のようにユニークなものもありました。

1968年に約160gもあったポケットベルも1998年には最軽量の約45gのものが発売され、よりコンパクトに持ち運びやすくなりました。

■主なポケットベル

1968年 7月	B型 約160g(音のみ)
1988年12月	カードタイプ 薄さ5.1mm(音のみ) ペンタイプ(12ケタの数字や記号表示)
1990年 3月	ディスプレイカードタイプ
1991年 2月	自由文字表示タイプ
1992年 8月	プレシャス(腕時計タイプ)
1994年 3月	Jリーグポケベル
1995年 7月	ページングトーク(電子手帳一体タイプ)
1996年 3月	漢字表示方式(ネクストサービス) パルディオP×P(PHS一体タイプ)
1997年 9月	キッズベル
1999年 2月	O2・DO(ゼロニード)



初期のポケットベル



カードタイプ



ペンタイプ



ページングトーク



キッズベルポリスくん



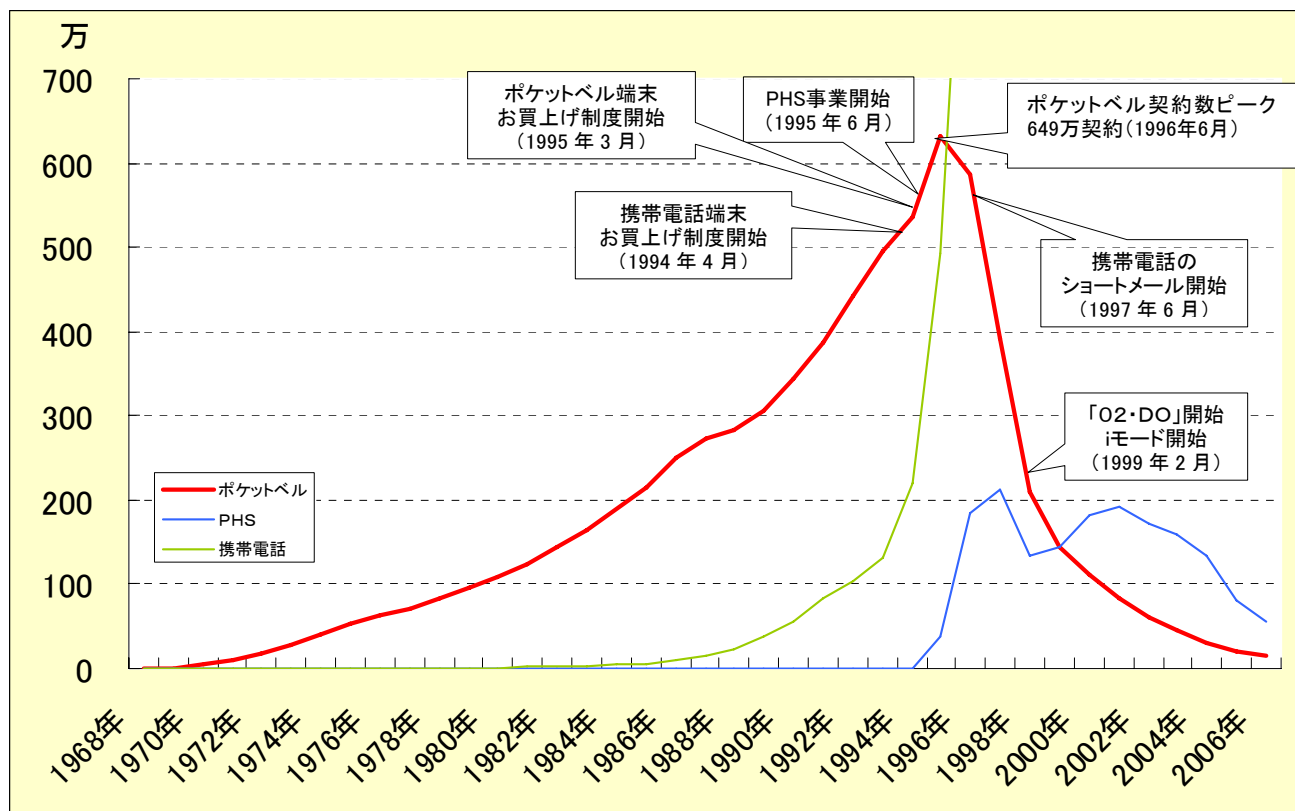
プレシャス

■ポケットベルのイメージキャラクター

当時の若年層を代表する「葉月 里緒菜」さん、「広末 涼子」さん、「加藤 あい」さんに登場していただくなど、話題を呼びました。



■ドコモのポケットベルの契約数の経緯



■ポケットベルの主な年表

	ポケットベル	携帯電話	PHS
1968年	サービススタート(東京23区) 保証金導入(70年)	-	-
1979年 ~ 1994年	テレメッセージ系各社参入(86年) 500万契約突破(94年)	自動車電話サービス開始(79年) 保証金制度廃止(93年) 端末お買上げ制開始(94年)	-
1995年	端末お買上げ制開始 保証金制度廃止 600万契約突破	300万契約突破	PHSサービス開始
1996年	ネクストサービス開始 インフォネクスト(漢字表示)開始 (電光掲示板等へニュース表示)	新規加入料廃止	パルディオP×P発売 (PHS・ポケットベラー一体型) 100万契約突破
1997年	「インフォチャンネル」サービス開始 (ニュース配信) 「ドコデモマルチ」開始(全国エリア)	1,500万契約突破 ショートメールサービス開始	200万契約突破 64Kデータ通信開始(98年)
1999年	「02・DO(ゼロノード)」開始 (基本料無料)	iモード®サービス開始	ドッチーモ発売 P-in 発売(カード型)
2001年	ブランド名を「クイックキャスト」に変更	FOMA®サービス開始	ブラウザホン発売 定額制開始(2003年)
2004年	「インフォチャンネル」サービス終了 新規受付終了	おサイフケータイ®開始	新規受付終了(2005年)
2007年	クイックキャストサービス終了	HSDPA開始(2006年)	2007年度第3四半期を目途に サービス終了予定

■ポケットベル使用料・保証金の主な変遷

	月額使用料	保証金など
1968年7月	2,000円	予納金10,000円 10ヶ月間1,000円ずつ使用料に充当
1970年7月	2,000円	保証金導入 10,000円
1975年4月	1,900～2,000円	保証金値上げ 20,000円
1988年12月	2,500～3,200円	保証金値下げ 15,000円 定型文タイプ20,000円
1990年3月	2,500～3,300円 大口割引開始	同一名義で全国30契約を超える場合は保証金不要
1991年2月	2,500～5,500円	自由文販売開始20,000円
1993年9月		呼出専用・数字表示5,000円 定型文・自由文10,000円
1995年3月	お買い上げ制度開始	保証金値下げ3,000円
1995年5月		保証金廃止
1996年3月	従量課金導入 (月200回を超える分は50回ごとに300円)	
1999年2月	「02・DO(ゼロノード)」開始(基本料無料)	—

※月額使用料はご利用のサービスやエリアにより異なります。

※表中にある料金やサービスは関東甲信越地域のものであります。

※「クイックキャスト」「ポケットベル」「iモード」「FOMA」「おサイフケータイ」は株式会社NTTドコモの登録商標です。